

非常に小型のもの、中型、大型のものがみられる。頸部を屈曲させるものと直立させるものがそれぞれの大きさのものにみられる。

針 (第28図 19)

小破片であるが、内彎する口縁部を持つ鉄鉢型を呈するものである。

甕 (第29図 1・2)

中型、大型がある。沈線を巡らせ、櫛刺突文を施すものや、凸帯を巡らすものがみられる。

瓶 (第29図 3～6)

横瓶の破片であるが、頸部付近にはボタン状の貼付文つものがみられる。

陶碗 (第29図 7)

圈脚円面碗であるが、脚台下部を欠損する。脚台部には上下二段に方形の透かしが施されている。縁外周には筆立てと思われる六角柱状のものが付されている。

出土須恵器の位置づけ

本瓦窯跡出土須恵器の編年の位置づけについては、調査報告書において齋藤孝正氏によって検討されている。ここではその成果を援用し、本瓦窯跡出土の須恵器の位置づけを行う。

本瓦窯跡出土の須恵器を特徴づけるのは、坏蓋A類と坏蓋B類がみられることであろう。加えて坏蓋A類はA1類とA2類がみられる。

これらの特徴から、編年的に確立されている周辺地域と対比してみたい。

愛知県猿投窯 (第30図)

猿投窯において、坏蓋A類が出現するのは岩崎17号窯式1段階である。当該期のかえりは坏蓋A1類であり、かえりが退化した坏蓋A2類は2段階に比定されている。次の岩崎14号窯式になって坏蓋B類が新たに出現する。1点ではあるが採集されている擬宝珠状のつまみは、やや扁平化しており、本期のものに類似する。

岐阜県美濃須衛窯 (第31図)

Ⅲ期後半代に比定されている、那加5号窯出土品についてみると、坏蓋A・B類ともみられるが、A類でもA2類のみでA1類は前段階にみられる特徴である。続くⅣ期第1小期では坏蓋A類がみられなくなる。

静岡県湖西窯 (第32図)

Ⅲ期の中で坏蓋A1類に特徴づけられる第2小期と、坏蓋A2類を伴う第3小期に区分することができる。続くⅣ第1小期は坏蓋B類が出現する時期とされている。

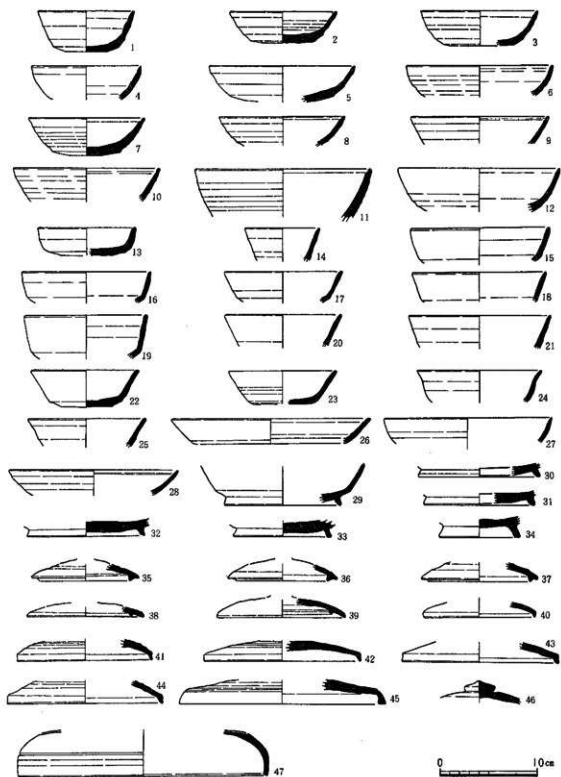
以上のことから、本瓦窯跡出土の須恵器は7世紀第4四半期から8世紀初めあたりに比定してもよいのではないかと考える。

神図出典

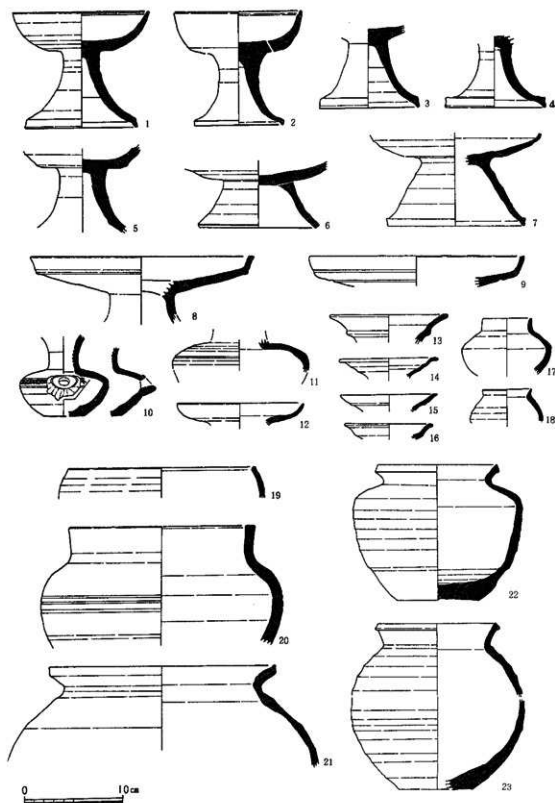
第30図 齋藤孝正「第3節 出土須恵器の編年の位置付け『天狗沢瓦窯跡』1990 岐阜町教育委員会

第31図 渡辺博人「美濃須衛窯の須恵器生産 一飛鳥・白鳳時代を中心として―」『古代文化』第40巻第6号
1988 古代学協会を改編

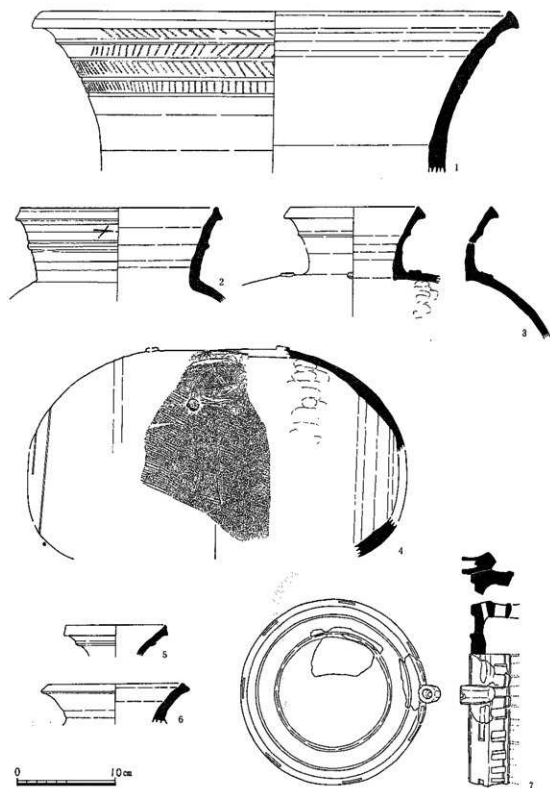
第32図 後藤健一ほか『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』1987 湖西市教育委員会を改編



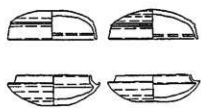
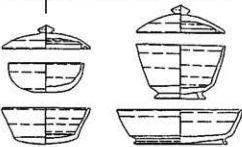
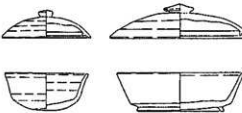
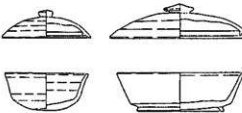
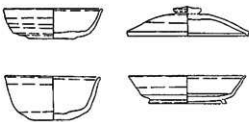
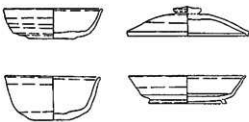
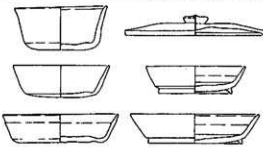
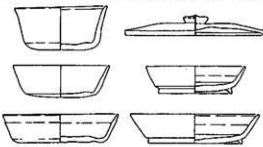
第27图 天狗沢瓦窯出土 須恵器 (1)



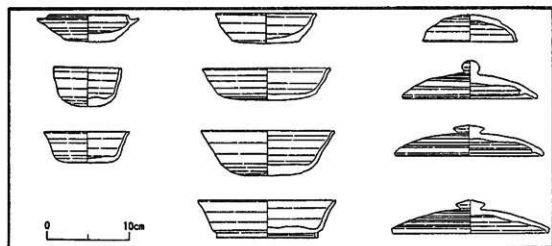
第28图 天狗沢瓦窯出土 須恵器 (2)



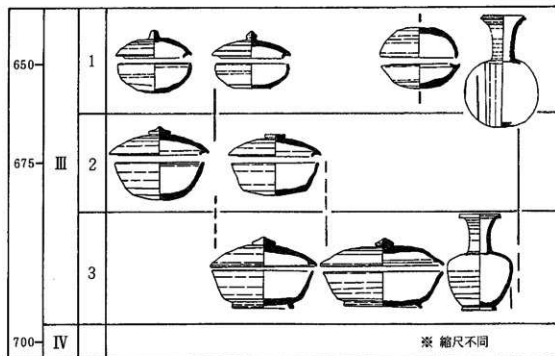
第29图 天狗沢瓦窯出土 須恵器 (3)

650	東山 50 号 窯 式			
	岩 崎 17 号 窯 式	1 段 階		
		2 段 階		
	岩 崎 41 号 窯 式			
700	高 藏 中 2 号 窯 式			
			0	10cm

第30图 猿投窯Ⅲ期 坏類変遷表



第31図 美濃須南窯Ⅲ期後半(第加5号窯出土) 須恵群



第32図 瀬西窯Ⅲ期 瀬年モデル

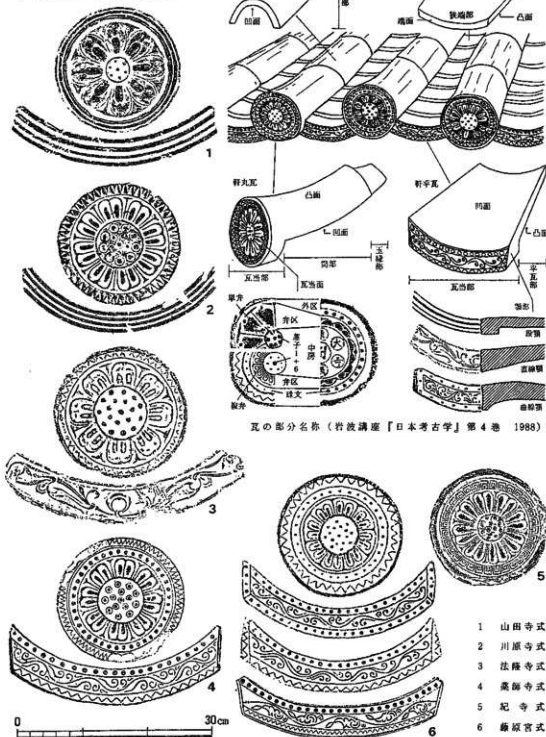
白鳳瓦からみた畿内と地方

上原 真人

要 旨

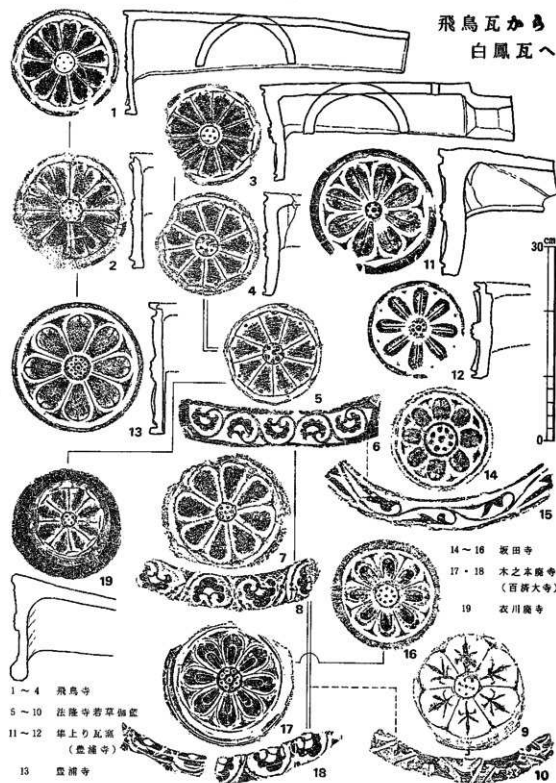
- 1 「白鳳時代」は7世紀中葉～8世紀初頭、「畿内」は大和・山背・摂津・河内・近江を含むと仮定して話を進める。
- 2 白鳳瓦は山田寺式・川原寺式・法隆寺式・紀寺式・薬師寺式・藤原宮式・大官大寺式などが代表的。山田寺式以外は、複弁蓮華文軒丸瓦が主流を占める。しかし、天狗沢瓦窯の軒丸瓦は、飛鳥時代の伝統を引く素弁蓮華文軒丸瓦である。
- 3 天狗沢瓦窯と同様、飛鳥瓦の伝統を引く素弁蓮華文軒丸瓦や忍冬文軒丸瓦、あるいは初現的な単弁蓮華文軒丸瓦は、東は関東地方、西は北部九州に至るまで伝播している。
- 4 しかし、その文様系統は、畿内以外の各地では1代限りで終わる場合が多い。たとえ2代以上続く場合でも、律令地方行政単位である郡(評)内あるいは隣接する郡の間で、面的な広がりをもってその系統の瓦が分布する例はなく、せいぜい近隣の1～2ヶ所で完結する。
- 5 天狗沢瓦窯の素弁蓮華文軒丸瓦と同じ文様・技術系統の瓦は、近江衣川廃寺・飛騨杉崎廃寺・信濃明科廃寺という具合に東山道沿いに線的に分布する。
- 6 同様の線の分布は、北陸道沿いの近江穴大廃寺・越前深草廃寺・越中御亭角廃寺・越後横滝山廃寺の素弁蓮華文軒丸瓦などの例があるが多くはない。
- 7 これに対し、山田寺式・川原寺式・法隆寺式などの典型的な白鳳瓦では、各地に伝播・定着して独自の文様系統を生み出し、それが面的な広がりをもって分布する場合が少なくない。
- 8 古代の瓦からみた畿内と地方の関係を次のように類型化する。
第Ⅰ類：畿内と似た文様の瓦がそのまま地方に伝播し、第2世代を生むことなく消滅する場合。
第Ⅱ類：同じ系統の文様が、畿内から延びる旧交通路に沿って線的に分布する場合。これも各々の土地で第2世代を生むことは稀である。
第Ⅲ類：畿内に源流をもつ文様が独自の地方色を生み、隣接する郡(評)を含む面的な広がりをもって分布する場合。その分布は律令地方行政単価である国を越えて広がることも少なくない。
第Ⅳ類：第Ⅲ類のような面的な分布が、律令地方行政単位である国を境界とする場合。
- 9 第Ⅰ類は7・8世紀を通じて存在する類型であるが、飛鳥瓦の伝統を引く素弁蓮華文軒丸瓦や忍冬文軒丸瓦のほとんどはこの類型に属する。
- 10 第Ⅱ類は飛鳥瓦の伝統を引く素弁蓮華文軒丸瓦の一部にみられる。
- 11 第Ⅲ類は山田寺式・川原寺式・法隆寺式などの白鳳瓦にみられる。
- 12 第Ⅳ類は8世紀代の国府系瓦(国分寺系瓦・国衙系瓦)に多くみられる。

瓦の部分名称と
代表的な白鳳瓦

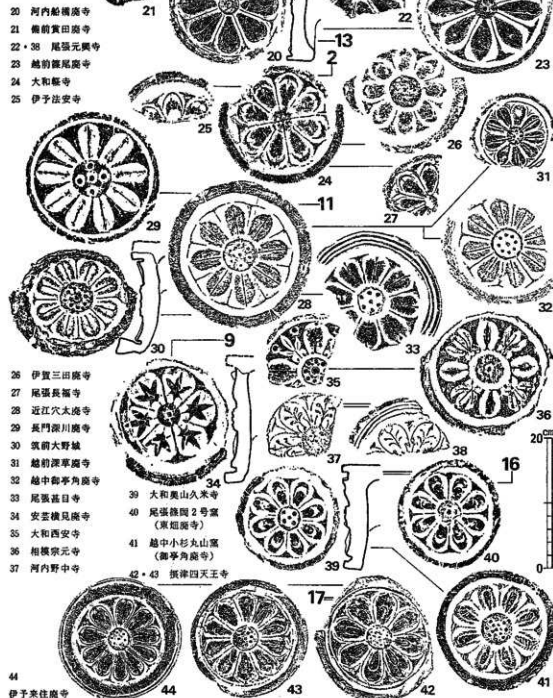


瓦の部分名称 (岩波講座「日本考古学」第4巻 1968)

飛鳥瓦から
白鳳瓦へ

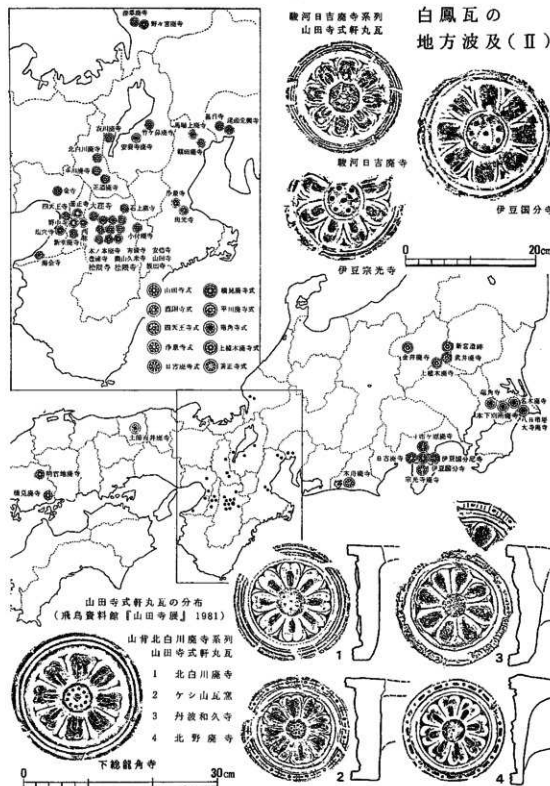


白鳳瓦の
地方波及



西海道 山陰道 南海道 山陽道 畿内 東海道 東山道 北陸道

白鳳瓦の
地方波及(Ⅱ)



幅1.95m、高さ2.2mの大きな石室である。遺物は明治時代に掘り出されたものであるが、一括して保存されており、古墳築造・使用年代を須恵器や馬具から推定することが可能である。古墳の築造は6世紀後半に行なわれ、追葬は7世紀後半まで継続されたと推定される。銅鏡が築造時に副葬されたものか、追葬にともなったものなのかは明らかではないが、毛利光俊氏の分類(3)によれば無台鏡A類Iに属し、7世紀後半に置かれる可能性が高い。

問題の銅鏡は、口縁部と底部の一部破片から、報告者の菊島美夫(坂本)氏が復元実測したもので、直径23cm、高さ7.8cm、口縁部の厚さ3mm、底部の厚さ2mmである。口縁外面に4条の沈線が通っているが、鋳造後にクロで平滑に仕上げられた痕跡であろう。

③ 寺の前古墳(4)

狐塚の東50mに位置していた円墳で、直径10m程の規模であったが、1964年、土地所有者が塚を開墾し、横穴式石室部分と思われる場所から、銅鏡のほか須恵器・土師器・鏡・直刀・鉄鏃・馬具などが出土した。銅鏡は、直径10.9cm、高さ4.7cmで、口縁部に3条の沈線、外部底面に3重の同心円文の沈線が通る。出土品の馬具や須恵器から、古墳の築造年代は6世紀末で、追葬が7世紀後半まで行なわれたと推定される。銅鏡の年代は特定できないが、狐塚古墳と形態が類似していることから、ほぼ同年代と考えてもよさそうである。

これらの3基の古墳に共通する点は、出土物に須恵器と馬具を伴う点である。石室の形態は、狐塚古墳だけが消滅して定かではないが、この時期では狐塚古墳・稲荷塚古墳と同様に横穴式石室であろう。また、3基の古墳の出土遺物の年代を比較すると、多少の差があるかもしれないが、ほぼ6世紀末に埋葬が開始されたものとしてよからう。

この地域の古墳は、御飯町や一宮町にある古墳を除いては、一般的に馬具が副葬される場合が多い。しかも、馬具と銅鏡との伴出関係は、本県の場合、3例中3例が一緒に出土している。この点からも、極めて両遺物の関係が密であることが想定できる。

馬具は騎馬風習にもなっており、5世紀前半に大陸から伝播したもので、7世紀に地方でも盛んに副葬品として埋納されるようになった。このような騎馬風習と馬の飼育は、当時の先進的な豪族によって取り入れられたものと思われ、そのことが豪族の地域的な地位を高めるのに大いに役立ったことであろう。また、進取の気性に富んでいたからこそ、新たな仏教文化を享受することができたのではなからうか。

2. 白鳳時代寺院関係遺跡

今日までのところ、白鳳時代の寺院関係遺跡は、山梨県下で3箇所しか発見されていない。それは、春日居町寺本庵寺と寺本庵寺に瓦を供給した川田窯跡、供給先の不明な数島町天狗沢窯跡である。春日居町は白鳳時代寺院が建立されただけあって、後の山梨郡の中心地になった新興勢力の地域である。一方、古代巨麻郡に属する数島町天狗沢からは、県

下最古の白鳳時代瓦窯が発見されている。このような遺物・遺跡のあり方からすると、寺院建立を企画する各地の有力豪族は、前時代の銅鏡の副葬にも見られるように、急速く中央に広まっている仏教文化の摂取に力を入れていたことが想定されよう。中央に固く結び付き、仏教文化を広めることは、『大化の改新』(645年)を乗り越えた地方豪族にとって、新たな政治的発言力を強めるための必要不可欠な行為であった。

全国的な傾向から見て、各郡ごとに1箇所もの白鳳時代寺院が建立されたといわれるが、本県では巨麻郡と山梨郡に関連遺跡が発見されているものの、八代郡と都留郡からは未発見である。都留郡は、古墳分布が希薄な点からも、寺院建立までの力を想定することは困難とであろう。また、八代郡では6世紀～7世紀の古墳も多く、当時の集落遺跡も濃密に分布していることから、寺院跡が今後発見される可能性もある。

では、白鳳時代寺院関連遺跡を概観しておこう。

① 天狗沢窯跡

中巨摩郡数島町天狗沢字北川にあり、貫川の左岸で台地の南斜面に立地する。遺跡の内容は、他の報告書で詳述しているので、ここでは省略する。

② 寺本庵寺(5)

春日居町によって、1981・1982・1986の3年間に寺域及び伽藍配置確認の調査が行なわれ、一定の成果が認められている。寺域は方一町(一辺が約130m)の正方形で、この線上に幅約6mの築地がめぐる。築地には東西南北の門が付けられていたと思われ、発掘調査でそれらの一部が検出されている。寺域内部の伽藍配置は、法起寺式伽藍配置と目されているが、講堂・金堂・塔が東西の中心よりも南側に位置しており、このために中央講堂の軒に接するように南東に塔、南西に金堂が並ぶ。講堂から塔・金堂を囲んで中門に回廊が巡らされ、僧房は講堂の北側に長軸を南北方向に向けて位置している。伽藍配置が東西中軸線の南側に納まるところから、講堂を中金堂と見立てると、川原寺式の伽藍配置という可能性も推定されている。

出土物には、舍利埋納物の一部と思われる白磁の丸玉と石英、塑像仏像の一部である螺髪・肩・袖の破片が、僧房や講堂から発見された。この結果、本寺院には丈六仏の本尊と2体以上の小仏像が安置されていたことが推定され、塑像の胎土から製作地が甲斐国内であることも明らかにした。寺院の屋根を葺いた瓦は多量に出土しているが、軒丸瓦246点は8種類に分類でき、軒平瓦は53点で7種類に分けられる。報告者はこれらの瓦が白鳳時代の670年頃と、天平時代8世紀中葉の2時期に置かれると推定している。

寺院の性格について、国分尼寺・旧国分寺・郡寺・豪族私寺・国府寺説など幾つかの説が出されているが、今日では、豪族私寺→郡寺という変遷で捉えるのが一般的である。また、この寺院建立に携わった豪族の特定であるが、石田茂作氏は日下部連の一族(6)と推定し、坂本美夫氏は大伴氏を想定している(7)。又、十稜駿武氏は百済系渡来氏族が寺院の造営や瓦・仏像の製作にあたった可能性が高いと考えている。

瓦の年代から、寺本廃寺の創建年代は670年頃と言われるが、年代を考えるための手掛かりとして、この寺の瓦を焼いた窯が、甲府市川田町231番地にある。この窯については後述するが、地形的に平窯の可能性もあり、平窯だとすれば寺本廃寺の創建が奈良時代初頭にまで下る事も考えられる。

③ 川田窯 (8)

甲府市川田町231番地他に位置する窯跡。甲府市東部の平坦地、標高265mの微高地に立地し、南側を流れる小水路との比高は、わずか1m~1.5mである。1948年(昭和23年)に中島正行氏によって発見された窯跡で、その報告は同年に発表されている(9)。報告にある遺物は軒丸瓦(三重圏縁弁八葉蓮華文瓦・二重圏縁弁八葉蓮華文瓦・複弁八葉蓮華文瓦)、丸瓦、平瓦、鰭尾、磚である。これらの遺物のうち、寺本廃寺出土の軒丸瓦と共通するものと、甲斐国分寺・国分尼寺出土瓦に共通するものが出土している。このことから、本窯跡は白鳳時代の寺本廃寺建立の時代に操業が始まり、奈良時代中頃の甲斐国分寺などに瓦を供給した窯と推定されてきた。

今日までのところ、川田窯跡以外に寺本廃寺の瓦を出土した窯跡推定地は発見されていないので、恐らくこの地が寺本廃寺の屋根瓦製作産とみてよい。しかし、現在ではこの場所は宅地化されて周囲の畑よりも一段と低くなっている。恐らく、かつての粘土採取によって、窯が削平されてしまい、その構造が現存していないものと思われる。したがって、仮に遺物が残っていても、窯の灰原付近の遺物だけであろう。また、窯の立地している現地からは、登り窯構造の窯の存在を想定することは困難(註1)であり、平窯構造とも考えられる。

平窯は現在の学界の定説では、藤原宮造営のときからで、半地下式の権原市日高窯は藤原宮造営の為に造られた、その最初の窯である。藤原宮の造営が690年代であるから、地方に平窯の技術が伝播するのは8世紀初頭といわれる。その年代では窯の年代が新しくなりすぎという意見もある。

しかし、この川田窯が平窯であったにしても、寺本廃寺が8世紀まで下ることを決定づけるかといえ、一概に結論づけることは困難であろう。というのは、寺本廃寺創建期の窯が別に存在し、川田窯は寺本廃寺の補修瓦窯とすれば、国分寺瓦も同地点から出土することが納得できる。だが、この場合には、この付近で創建期の窯を探さなければならぬことになる。旧来より、甲府市川田町、桜井町、和戸町、横根町辺りの徹底的な分布調査が、何回か繰り返されているが、残念ながら今現在では、この時期の瓦窯は検出されていない。

3. 寺院建立の古代豪族

白鳳時代以前、6世紀後半から7世紀の甲斐国内の豪族分布は、大型横穴式石室を持つ古墳の分布に象徴されるように、甲府盆地の西と東に大きく別れていた。東には御坂町井之上に埴塚古墳があり、西には甲府市千塚の加牟那塚古墳や万寿森古墳がある。埴塚古墳は石室全長17.54m、加牟那塚古墳は16.75m、万寿森古墳は14.2mで、現存する古墳の中では、この3基が群を抜いて大きい。ということは、白鳳時代前夜の甲斐は、これら盆地をささむ東西の2大勢力に別れて、豪族が覇を競っていた可能性も想像できよう。

同じように、白鳳時代の寺院及びその関連遺跡も、現在のところ甲府盆地の東と西にそれぞれ発見されている。これは偶然ではあるまい。中央や地方を問わず、645年の大化の改新(義襲は有るが)によって、それまで通用していた古墳文化社会の論理が崩れた。権威の一つの象徴であった墳墓としての高塚古墳は、薄葬令などによってその規模が規制され象徴性を失うと、豪族達は新たなシンボルや価値観を求め始めた。それが、地方豪族の仏教受容と寺院建立の動きであり、朝廷の意志に沿う方向でもあった。

白鳳時代の東部地域には寺本廃寺と川田窯跡、西部地域には天狗沢窯跡が存在しているが、両地域の豪族あるいは評造が、仏教文化を急速に摂取しようとしていた背景がそこにある。しかし、両地域の奈良時代以降の発展には大きな差があった。盆地東部の春日居地域は、甲斐国の国府が置かれるような中心地として発展し、一方、盆地西部の敷島地区は、巨麻郡という盆地西側半分を郡域とする、広大でまとまりのない郡の中心地となった。このことは、通常、巨麻郡の人口の少なかつた事が原因として説明されているが、むしろ巨麻郡域を支配していた勢力の大ききの反映として見るのが普通ではなからうか。

つまり、一つの豪族かその一族が、このような広大な地域を掌握していたからこそ、山梨郡のように東郡・西郡に分けられることもなく、一部としてまとまっていたのであろう。その証拠に、後期古墳群は甲府市北部の愛宕山山中や、塚原、千塚、湯村、湯村山山中、敷島町、双葉町、韭崎町、須玉町、長坂町、高根町、甲西町、櫛形町、増穂町などに、類似した石室構造の古墳が数多く造られており、今日でもその一部が残っている。これらの古墳群出土品のうち、豪族を特定できるような、特徴ある遺物が発見された事は無いが、天狗沢窯跡周辺の赤坂台古墳群からは、金銅製馬具の飾り金具や轡の出土がある。当時の馬具は、実用品であるとともに、有力者の権力を示すための貴重品である。古墳群の数や馬具など出土品の豊富さにもかかわらず、盆地西部の発展が遅れ、奈良・平安時代の郷が、巨麻郡内部にまばらに置かれた要因は何だったのであろうか。その原因を、つぎのように考えることもできる。

甲斐に関係する白鳳時代の文献はあまり残っていないが、壬申の乱(672)で大海人皇子側に参戦した甲斐の豪族が、「甲斐の勇者」として記載されている(『日本書紀』)。この記事から、関氏(10)は「甲斐の勇者」を騎馬兵と考え、大海人皇子の要請に呼応して派遣された軍事勢力の一つだとすれば、単なる地方豪族ではなく、国司・評造など

の公権力を構成する豪族に強く結び付いた軍勢力と想定した。このことは関氏の述べているとおりであろう。『甲斐の勇者』が参戦した壬申の乱は、大海人皇子が勝利し、『甲斐の勇者』は甲斐国内で最も朝廷に近い存在となった。

では、もう一方の仏教文化が生まれた甲府盆地西部の状況はどうであろうか。

天狗沢窯跡にかかわる寺院建立のバックには、文献にのこる古代氏族のうち、壬生直をあげることが可能ではなかろうか。壬生氏については、三代実録元慶6年(882)11月己巳条に、「甲斐国巨麻郡左近衛将曹従六位上壬生益成」の名が見える。壬生伯は6世紀後半以降に設けられた名代または子代で、壬生直は壬生伯の民を管掌するために全国に置かれた地方的伴造であった。文献からは、巨麻郡の何処の郷に居住していたのかは不明である。壬生伯は乳部とも書き東国の相模・甲斐・安房・常陸・上野・武蔵などに広く設置され、強大な勢力を持っていた。その設置年代は、三枝直・小長谷直などよりも約1世紀程度遅れていたと見られ、この時期は県下第二の横穴式石室の規模を持つ加牟那塚古墳の築造時期にあたる。

なお、横田健一氏は、『鎌倉実記』(藤謙斎述 享保二年)が引用した『伊豆風土記』を検討し、「聖徳太子の御領、即ち田荘ないし乳部のごときものが、甲斐・伊豆にあったらしい」(11)と想定し、それは聖徳太子の死後も伝承された可能性も指摘している。また、武蔵国埼玉郡の壬生氏と聖徳太子のつながりも、原島礼二氏(12)によって指摘されている。『日本書紀』皇極2年(643)に、蘇我入鹿の襲撃をうけて敗北した山背大兄王に、三輪文屋君が「東の国に詣りて、乳部をも本として師を興して還りて戦はむ。その勝たむこと必じ」と進言しているが、この進言も、山背大兄王が東国の壬生伯を伝承していることを想定させるもので、そうであれば、上宮王家と巨麻郡の関係は極めて強いものと言えよう。想像をたくましくすれば、天狗沢窯跡が甲斐国で最初の寺院建立に拘わった原因が、このような処にあるのかも知れない。

天狗沢窯跡にかかわる寺院の建立者が、壬生直であるかと断定はできないが、否定できる資料も無い現在では、この程度の想像力を発揮し、具体性を持たせておきたい。

巨麻郡に強大な勢力が存在したことは、前述した加牟那塚古墳を始めとする湯村・千塚古墳群や赤坂台古墳群の存在から推察できるが、この勢力を天智天皇7年(668)に滅びた高句麗からの渡来人とみる意見もある。このころ、朝鮮半島では660年に百済が新羅に敗れ、8年後に高句麗が敗れ、両国から多くの渡来人が日本に移住してきた。巨麻郡は高句麗の「高麗」からおこった郡名ともいわれ、多くの高句麗人がしばらくの間居住していた。霊龜二年(716)に「駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の7国から高句麗人1799人を武蔵国に移して、高麗郡を建てる」(『続日本紀』巻七)とあるから、高句麗人が甲斐国に居たのは凡そ50年間という事になるだろう。この間、巨麻郡の豪族が建立しようとしていた寺院、即ち天狗沢窯から瓦を供給された寺院にも、技術提供や労力提供など相当な影響を与えたに相異ない。なお、彼等が寺院建立を計画し、実行に移し

たとえられる8世紀初頭の小規模寺院が、蜷崎市藤井町宮の前遺跡(13)から発見されており、瓦塔、鬼瓦、平・丸瓦などが出土している。

4. 天狗沢瓦の源流

天狗沢窯跡出土瓦のうち、その起源を推定できるものに、寺院の軒先を飾る軒丸瓦がある。

天狗沢窯跡出土の軒丸瓦には二種類がある。これはa類とb類に分けられているが、榑原功一氏の研究によって、二種類の瓦は同一の瓦の改変によるものといわれる(14)。しかし、このことにはまだ疑問点があり、一概には賛同しかねる点もある。というのは瓦面が、a類は凸面であるのに、b類は凹面であることである。凸面→凹面に変化する場合は中心部の中房部、蓮子などは、旧来の瓦を削り取り、この部分は全く新しく彫る必要があったであろう。a類とb類の瓦の中央部の中房と、縁との比高差は、それぞれa類が2cm2mm、b類が1cm4mmである。すなわち、a類→b類に瓦を改変するのには、瓦の中央部を8mmも削らなければならないことになる。8mmの厚さは中房の厚さを凌ぐものであるから、旧瓦の形態を壊さないと考えたほうが適切である。

なお、a類とb類が類似しているのは、同一工人によって製作されたか、拓本や型などを手本にb類が生み出された可能性が有するという事である。a類→b類の変化は、外因性の要素によって、高句麗系統(古新羅)の文様を、百済系統の瓦に変えなければならなかったのではない。ここに、特別な理由が、潜んでいるのではなかろうか。

その理由とは、壬申の乱によって大友皇子が没し、近江朝が滅びると、それまで助力を得てきた天狗沢窯跡にかかわる豪族の政権が揺らぎ始め、工人の長は、寺院の瓦を百済様式に近いものを採用する必要性に迫られたと見るのは、穿ち過ぎであろうか。

筆者は天狗沢窯跡出土のa類軒丸瓦は、蓮弁中央に鑄を持つことから、高句麗様式(あるいは古新羅様式)と見なしてきた(15)が、長野県明科廃寺、岐阜県杉崎廃寺、同衣川廃寺の瓦と類似することに注目した榑原功一氏は、衣川廃寺出土瓦の細検討を行った細川修平氏の意見を参考に、天狗沢窯跡出土a類軒丸瓦を「飛鳥様式の中でも最も退化した百済系瓦」と見なしているようである(16)。なお、b類も百済様式の「素文縁 花卉端剣尖形点珠形式」(17)に類似するという。

また、天狗沢窯跡出土a類・b類の瓦について、森部氏は「間弁を1条の凸縁で表すると見るのか、あるいは各凸縁を蓮弁の鑄と見るのか、それぞれ見解が分かれようが、(b類)からは間弁と見るのが妥当なように思われる。とすれば(a類)は凹弁ということになり、明科廃寺出土瓦に共通する」(18)という。更に森氏は、凹弁について古新羅の特徴の一つと言い、奈良片岡尼寺を代表的な例にあげ、類例として長野県明科廃寺、山梨県天狗沢窯跡などをあげている。

このように、天狗沢窯跡出土の瓦の系譜には諸々の問題点が存在するが、長野県東筑摩

郡明科町・明科庵寺、岐阜県古郡古川町・杉崎庵寺・寿楽寺庵寺、滋賀県大津市衣川庵寺など極めて類似性が高いことが明らかとなってきた。近江からの瓦製作技術だけでなく、飛騨地方は、大宝律令斐陀匠条の成立の基礎となった、飛騨地方の木工の故郷であり、「大宝律令制定前に内廷に関係深い部民として上番し、宮殿の修造はもとより各地の寺院の造営にたずさわった伝統をもっていただと考えられる。この伝統が、飛騨の寺院成立に重要な意味をもつものであり、用いた瓦類の様々な意味を示す」(19)といわれている。造瓦技術と寺院建築技術が合わさって、東山道を伝わり、甲斐国に初期の仏教文化が伝えられたことは間違いない。

まとめ

甲斐国の白鳳時代仏教文化の様子を整理し、まとめたい。

6世紀末～7世紀初頭の頃、仏教文化の片鱗として、銅鏡が八代郡や山梨郡の豪族に伝わっていたが、7世紀中頃には、聖徳太子とその一族の上宮王家と拘わりの深かった巨麻郡の豪族(壬生氏か)によって、寺院建立の気運が高まり、天智朝より技術者を招いて天狗沢窯の操業に至った。寺院の伽藍地業も当然ながら同時に進められていたものと思われる。一方、巨麻郡の様子を見ていた山梨郡や八代郡の豪族の間でも、寺院建立の計画が作られ始め、山梨郷(現在の春日居町寺本)に敷地を設定し、瓦は表門郷(甲府市山田)に窯を築いて生産することが計画された。寺本庵寺から出土する瓦は山田寺系瓦であり、天狗沢窯跡とは系統を共にする。

671年に天智天皇が亡くなると、翌年、その子大友皇子と天智天皇の弟大海人皇子との後継者争いが起こり、大海人皇子が勝利して673年に天武天皇となる。この《壬申の乱》の最中、『日本書紀』の記述の中に「甲斐の勇者、將軍大伴吹負の命により、近江軍の別將盧井鯨を追撃する」という記事が見えるが、この「甲斐の勇者」は、大海人皇子から動員を要請された甲斐の山梨・八代郡の豪族であった。乱の後、甲斐国の中心である山梨郡は、寺本において寺院の建立を成し遂げ、国の中心である事を内外に華々しく示した。以後、山田寺系軒丸瓦が東国に広く分布することは、天武天皇の成立にかかわっているかもしれない。

一方、巨麻郡では天智朝の崩壊によって、寺院建立を志し半ばで諦めたか、あるいは小規模に縮小したのであろうか。その寺院跡は未だに所在が明らかではない。

参考文献

- 1 末木 健 1988 『稲荷塚古墳』山梨県教育委員会
- 2 菊島美夫 1972 『狐塚古墳(春日居町) 稲荷塚(一宮町) 及び築舞場古墳(御坂町) 出土遺物の集成』『甲斐考古』9-2
- 坂本美夫 1988 『先史時代・古墳時代』『春日居町誌』春日居町

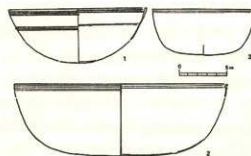
- 3 毛利光俊彦 1978 『古墳出土銅鏡の系譜』『考古学雑誌』64-1
- 4 坂本美夫 1988 『先史時代・古墳時代』『春日居町誌』春日居町
- 5 十妻駿武他 1988 『寺本庵寺』春日居町教育委員会
- 6 石田茂作 1950 『甲州寺本庵寺の発掘』『考古学雑誌』36巻3号
- 7 坂本美夫 1988 『寺本庵寺と古墳群・集落の関係』『寺本庵寺』春日居町教育委員会
- 8 甲府市 1989 『甲府市史』史料編 第1巻
- 9 中島正行 1948 『巴瓦製作の一考察』『郷土研究』2 参考文献
- 10 関 晃 1957 『甲斐史学』1 甲斐史学会
- 11 横田謙一 1974 『滅亡期における上宮王家の勢力について』『日本歴史』312
- 12 原島礼二 1978 『東松山市と周辺の古代』
- 13 山下孝司 1991 『宮の前第2遺跡・北堂地遺跡』山梨県教育委員会
- 14 榊原功一 1992 『天狗沢瓦窯跡の軒丸瓦』『丘陵』13号 甲斐丘陵考古学研究会
- 15 末木 健 1987 『甲斐白鳳時代寺院の一様相』『考古学雑誌』72-3
- 16 榊原功一 1992 『天狗沢瓦窯跡の軒丸瓦』『丘陵』13号 甲斐丘陵考古学研究会
- 17 稲垣晋也 1982 『飛鳥白鳳の古瓦』奈良国立博物館
- 18 森 郁夫 1990 『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 19 八賀 晋 1972 『岐阜県史』『通史編 原始』

天狗沢瓦窯跡関係論文・報告一覧

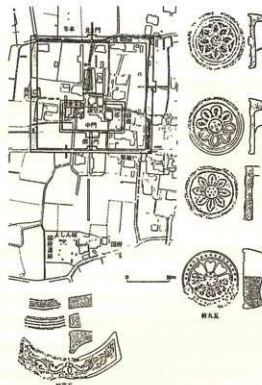
- 末木 健 1979 「山梨県における瓦窯址—数島町天狗沢窯跡を中心に—」『甲斐考古』16の2
- 佐野 勝廣 1982 「山梨県の古瓦」『甲斐考古』19—1
- 末木 健 1987 「甲斐白鳳時代寺院の一様相 —数島町天狗沢窯址発見隠瓦について—」『考古学雑誌』第72巻 第3号
- 末木 健 1987 「甲斐巨麻郡の成立と展開」『研究紀要』3 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 羽中田壮雄・末木健・榊原功一 1988 「天狗沢瓦窯跡発掘調査概報」数島町教育委員会
- 羽中田壮雄・宮沢公雄・風間信廣・榊原功一・斎藤孝正・末木健・上原真人・河西学・鈴木稔・千野裕道 1990 「天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書」数島町教育委員会委員会
- 森 郁夫 1990 「畿内と東国の瓦」京都国立博物館
- 末木 健 1990 「甲斐仏教文化の成立」『研究紀要』5 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 萩原 三雄 1991 「第7章・第3節 窯業の発達」『甲府市史』通史編第1巻
- 田代 孝 1991 「第7章・第4節 古代の信仰」『甲府市史』通史編第1巻
- 榊原 功一 1992 「天狗沢窯跡の軒瓦」「丘陵」第13号



窯跡位置図



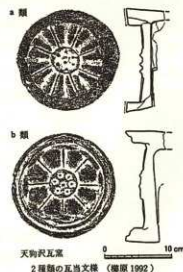
窯下出土隠瓦 (1. 数島町古墳 2. 数島町古墳 3. 数島町古墳)



寺本殿寺 (1988『春日原町誌』)



黒野・杉崎園寺出土瓦



天狗沢瓦窯
2種類の瓦当文様 (榊原 1992)